

2005年1月6日

## 高校進路指導担当者の「キャリア教育」に関する意識調査 進路指導担当教諭、高校生の「主体性」欠如を憂慮。 「キャリア教育」の意義を評価しつつも「仕事増」に「負担感」

株式会社リクルート(本社:東京都中央区 代表取締役社長:柏木斉)の進路指導専門誌『キャリアガイダンス』は、2004年10月、全国の国・公・私立高校の進路指導部を対象に進路指導の実態について調査を実施しました。

本調査では、昨年文部科学省から提言された「キャリア教育」に関する設問を用意し、進路指導担当教諭がどんな意識で「キャリア教育」を受け止めているかを探りました。

### 調査結果の概要

#### 「キャリア教育」の印象は、「期待感」が過半数で概ねポジティブな受け止め方 (P3)

キャリア教育に対する印象は、「期待感」が51.2%と過半数に上り、次いで「責任感」(32.5%)、「使命感」(27.1%)と続く。当事者としてポジティブな受け止め方をしている進路指導担当者が『キャリアガイダンス』誌の予想以上に多いことがわかった。

#### 「キャリア教育」の影響は、「生徒にとって有意義」との回答が過半数 (P4)

キャリア教育の影響については、「生徒にとって有意義」(52.6%)、「望ましい進路指導を実現できそうな期待がある」(32.7%)と、その意義を評価する一方、「学校現場で浸透するかは未知数」「教員の負担は相当大きくなりそう」との回答もそれぞれ37%に上り、今後への不透明感や負担感もうかがえる。

#### 高校生の「課題設定できない」「選択・決定できない」「将来計画できない」状況を憂慮 (P5)

進路指導の対象である高校生については、「自ら課題を設定しその解決に取り組むことができない」(49.4%)「主体的に選択・決定を行えない」(48.1%)「将来の目標に向けて計画・実行することができない」(46.8%)の3項目が突出。自分の進路を主体的に捉えられない高校生の現状に憂慮している実態が浮かび上がった。

#### 今後キャリア教育を推進するには「時間の確保が困難」との回答が9割 (P6)

実際にキャリア教育を推進していくにあたって想定される課題を質問したところ、「キャリア教育のための教員の時間確保」について、「非常に困難」(55.8%)「やや困難」(36.8%)との回答が合わせて93%にも上り、進路指導現場の多忙さをうかがわせた。

#### キャリア教育推進による変化は「仕事増」が8割と高いものの、「生徒の意欲増」も5割が予想 (P7)

今後についての予測は、「進路指導部の仕事増」(82.4%)「教員の仕事増」(81.9%)がそれぞれ80%を超え、突出している。しかし、「生徒の意欲」(54.2%)「生徒の満足度」(48.0%)、さらに「保護者の満足度」(46.0%)が増すと回答した割合も少なくないことが注目できる。

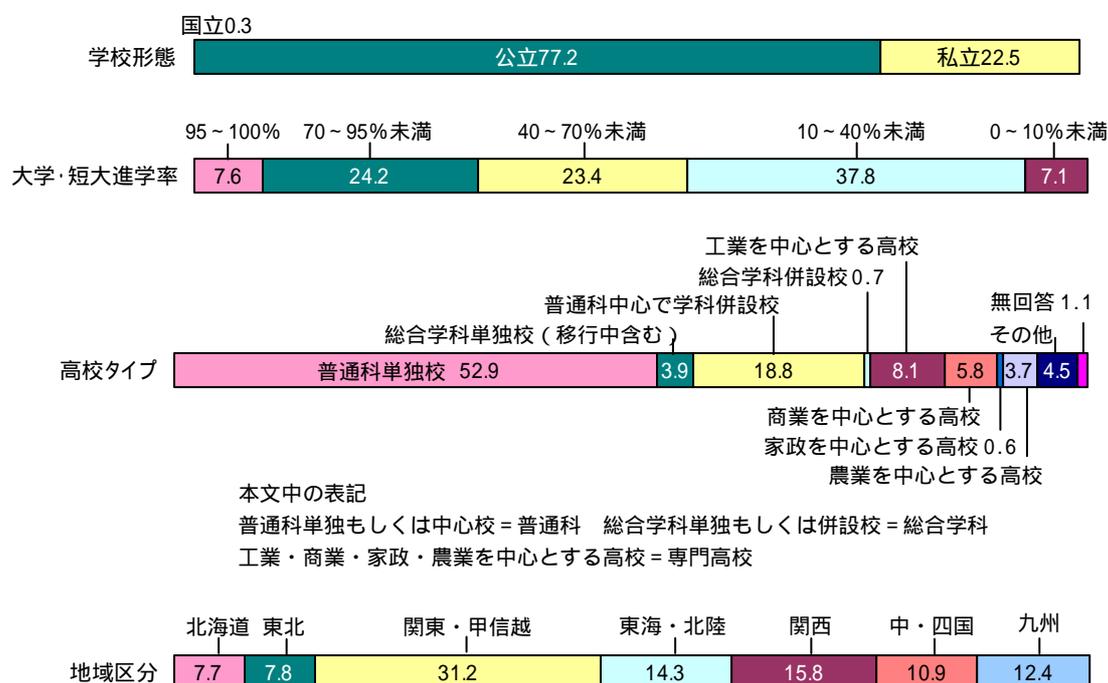
[本件に関するお問い合わせ先]

[http://www.recruit.co.jp/corporate/support/inquiry\\_press.html](http://www.recruit.co.jp/corporate/support/inquiry_press.html)

**調査概要**

調査期間：2004年10月4日～25日  
 調査対象：全国全日制高校（一部定時制含む）の進路指導部  
 調査方法：郵送法  
 調査発送数：5255  
 回収数：1268  
 有効回答数：1122（有効回答率21.4%）

**【回答校プロフィール】**



**「キャリア教育」とは**

「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」

端的には「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

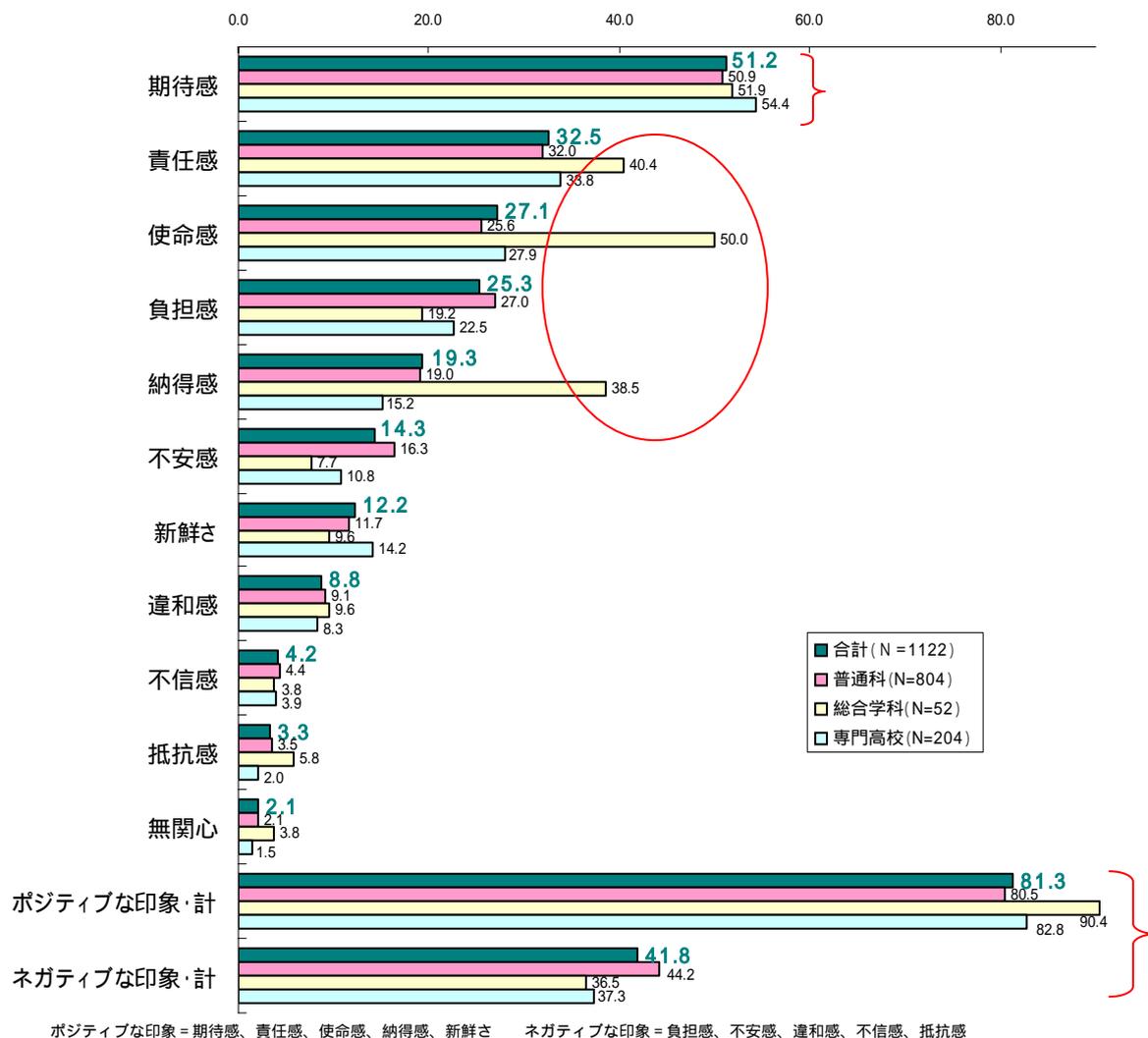
2004年1月 文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」本報告が定義。文部科学省は4府省プランの一環として「新キャリア教育プラン推進事業」を2004年より新規事業として開始、現在全国45地域で研究が始まっている。

(1)「キャリア教育」の印象

「キャリア教育に期待感」が過半数  
 「ポジティブな印象」の回答者は8割超す  
 総合学科で突出する「責任感」「使命感」「納得感」

ポジティブ、ネガティブそれぞれ5項目と「無関心」の11項目を用意し、「キャリア教育」に対して感じていることを全て選んでもらったところ、最も多かったのは「期待感」(51%)で過半数に上った。次いで「責任感」(33%)や「使命感」(27%)が上位に並び、何らかのポジティブな印象を持つ人は全体の8割。調査設計時に『キャリアガイダンス』誌が予想した以上に、ポジティブな受け止め方をしている進路指導担当者が多いことがわかった。一方、何らかのネガティブな印象を持つ人も41%で、「負担感」(25%)や「不安感」(14%)も決して低くはない。学校タイプ別に見ると、総合学科で「責任感」(40%)、「使命感」(50%)、「納得感」(39%)の値が突出している。

Q.「キャリア教育」についてどう感じているか (複数回答)

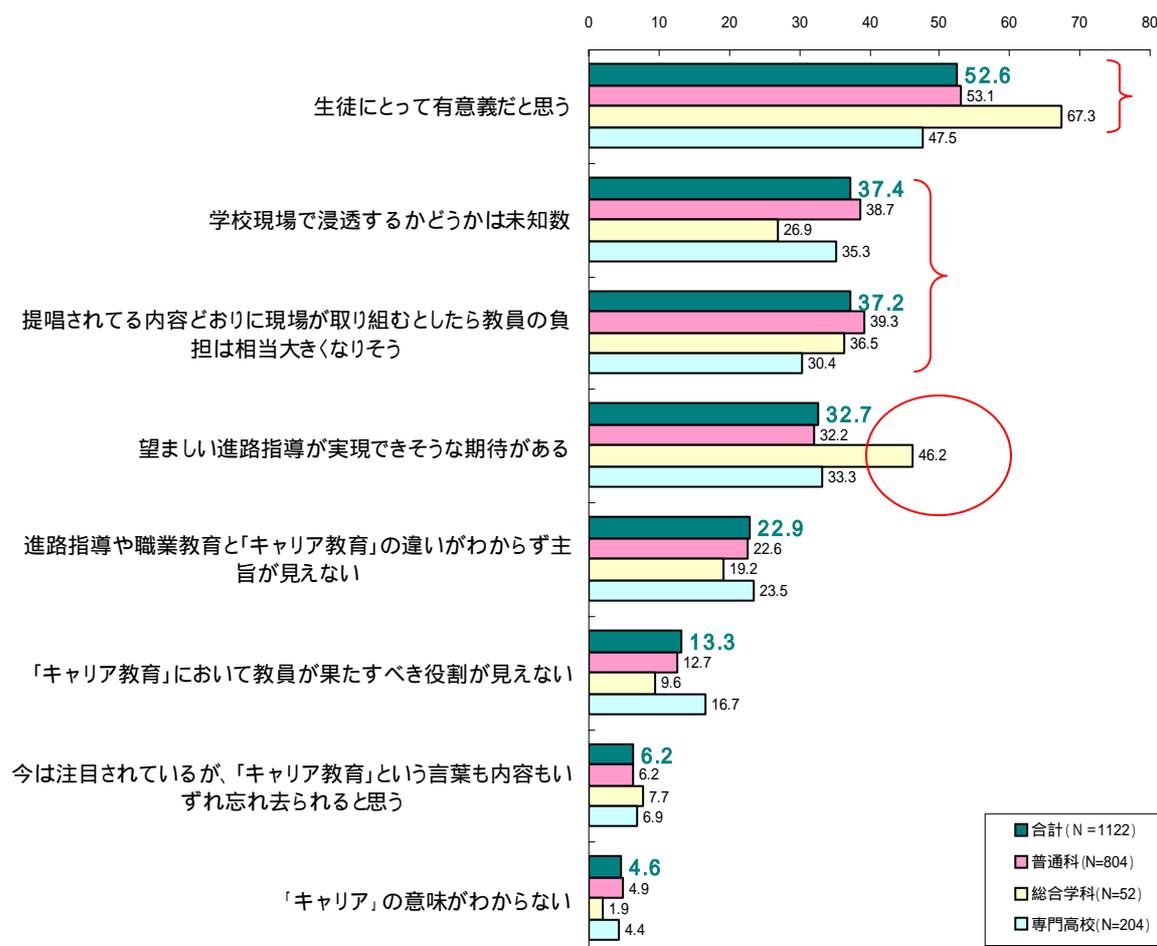


**(2)「キャリア教育」の影響についての考え**

**「生徒にとって有意義」が過半数**  
**3人に1人が「望ましい進路指導の実現に期待」**  
**「浸透は未知数」「教員の負担大」は37%**

「キャリア教育」の影響についての考えを聞いてみると、最も多かったのが「生徒にとって有意義だと思う」で53%。「望ましい進路指導が実現できそうな期待が持てる」も33%と高めで、この2項目はとくに総合学科で高くなった。このように「キャリア教育」の意義を評価する一方、「学校現場で浸透するかどうかは未知数」(37%)や「提唱されているとおりに取り組んだら教員の負担は相当大きくなりそう」(37%)も上位にあがっており、今後への不透明感や負担感もうかがえる。

**Q.「キャリア教育」についてどう考えているか** (複数回答)

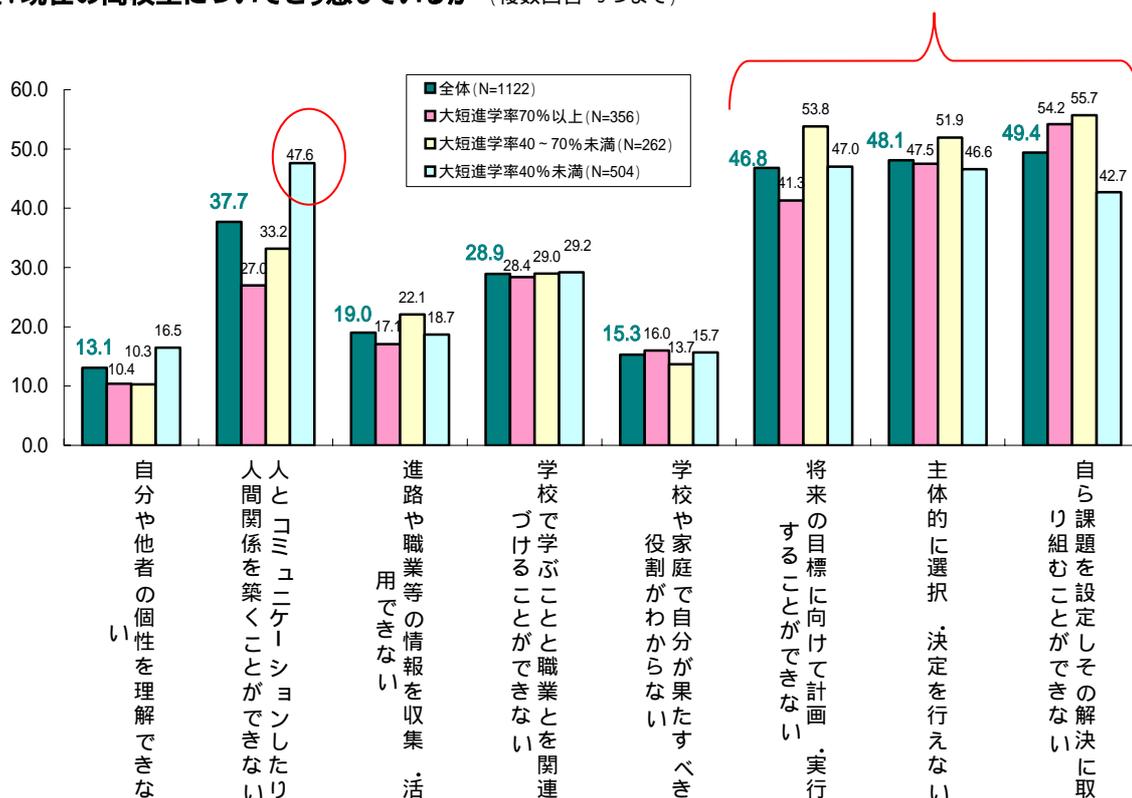


**(3) 進路指導現場で高校生に感じること**

**「課題設定できない」「選択・決定できない」「将来計画できない」高校生  
進路多様校で上記の回答が高め**

一方、進路指導の対象である目の前の高校生に対してはどのような問題を感じているだろうか。「キャリア教育」の学習プログラム例に取りあげられている「職業的(進路)発達にかかわる諸能力」に基づいた8つの質問を用意し、現在の高校生に対して顕著に感じることを3つまで選んでもらった。結果、「自ら課題を設定しその解決に取り組むことができない」(49%)「主体的に選択・決定を行えない」(48%)「将来の目標に向け計画・実行することができない」(47%)の3項目の高さが突出。自分の進路を主体的に捉えられない高校生の現状に憂慮している実態が浮かび上がった。こうした傾向は、進路が多岐にわたる大短進学率40~70%未満の高校で、より強く見受けられた。同40%以下の高校では、「人とコミュニケーションしたり人間関係を築くことができない」(48%)の高さが目立った。

**Q. 現在の高校生についてどう感じているか** (複数回答・3つまで)



自他の理解能力	コミュニケーション能力	情報収集・探索能力	職業理解能力	役割把握・認識能力	計画実行能力	選択能力	意思決定能力
人間関係形成能力		情報活用能力		将来設計能力		意思決定能力	

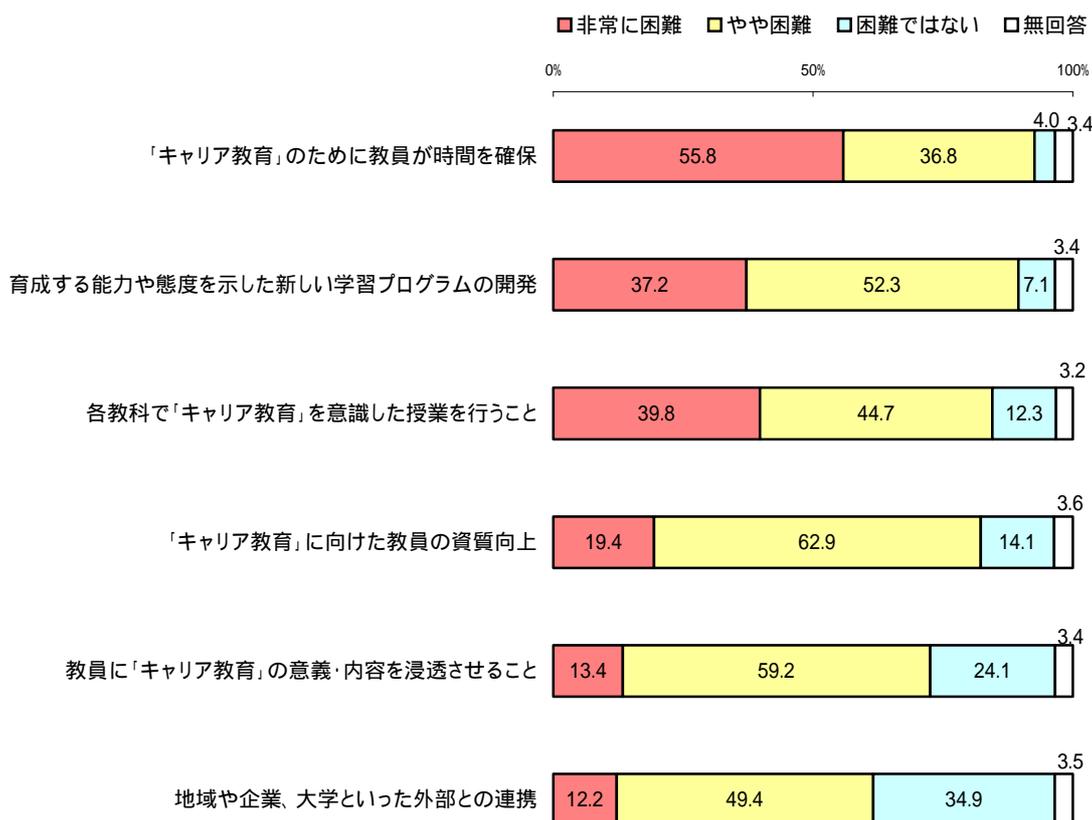
出典:「職業的(進路)発達にかかわる諸能力」は国立教育政策研究所生徒指導研究センター「職業観・勤労観を育む教育の推進について」の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」を参考にした。

**(4)「キャリア教育」推進の課題別困難度**

**「キャリア教育のための教員の時間確保が困難」が9割強  
次いで「新しい学習プログラム開発」も9割が困難と回答**

今後「キャリア教育」を推進していくにあたって想定される6つの課題について困難度を聞いたところ、「『キャリア教育』のために教員が時間を確保」するのに「非常に困難」との回答が55.8%と半数を超え、「やや困難」との合計は93%と、進路指導現場の多忙さをうかがわせた。続いて困難という認識が高いのは、「育成する能力や態度を示した新しい学習プログラムの開発」(困難計90%)、「各教科で『キャリア教育』を意識した授業を行うこと」(同85%)といった実行段階の課題だった。

**Q.「キャリア教育」を推進する上での次のような課題に困難を感じるか**



(5)「キャリア教育」推進による変化の予想

**「進路指導部・教員の仕事が増す」と8割が予想**  
**「生徒の意欲・満足度が増す」も半数 「保護者の満足度が増す」が続く**  
**効果について「わからない」層も一定数**

「キャリア教育」の推進によってどのような変化があるか、8つの点についての増減を予測してもらった。「増す」が多かったのは「進路指導部の仕事」(82%)、「教員の仕事」(82%)。圧倒的に仕事量の増加を予想している教員が多いことがわかった。しかし、「生徒の意欲が増す」は54%、「生徒の満足度が増す」は48%で、生徒にとっては概ね効果的と考えられているといえる。「保護者の満足度が増す」と予測する割合も48%と決して低くない。「わからない」と回答した、キャリア教育の効用について明確に判断できない層も一定数いるものの、多くの進路指導担当教諭たちが自らの仕事増を覚悟しつつ、生徒の意欲向上のための打開策としてキャリア教育推進に向かっているといえるのではないだろうか。

Q.「キャリア教育」を推進する上での次のような変化があるか

